



2010年7月15日 発行

2010年夏号

<第12号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/下野英世 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 works-union@y3.dion.ne.jp http://www.v-aid.org/union/

僕の人生

僕は高校卒業してすぐに港第二育成園へ入りまして4月10日まで、作業をしました。そして10月から、キクヤさんに実習（クーニング）の会社に行つて就職しました。就職できて嬉しかったです。

15年間がんばってほらいていました。タオルの枚数をかぞえて、けつそくしたりひっぱったりしていました。めっちゃ暑かったです大変でした。中国人のひともしっぱいはいつてきて一緒にほたいらいていました。仲はよかったですあまりしゃべりませんでした。僕はからだをこわして3月から集にきています。キクヤをやめたときは15年間がんばってきたししょうがないかなと思いましたが、集ではポルト、はりがねの計りをしています。

最初は大変でしたがみんなは、やさしく教えてくれます。どんな仕事がいいかはまだ決まっていますが、がんばってまたしゅうしょくしたいです。

伊藤裕三

ケアホームのこれから



開所当時は利用者七名だったケアホームも、現在は、三十名を超すほどの大所帯になっています。短期や中期自立体験、レスパイトの利用も含め、今後ますます生活支援を必要とする人は増えていくでしょう。次に創るべきケアホームは、どのような形なのか――。ユニオンの誰もが利用できるような、新しい形を検討していきます。

ケアホームでの利用者との各部屋に玄関があるという、ユニオンケアホームのマンションの形では、利用者本人からの報告がなければ、人の出入りを完全に把握することはできません。

「でもそれでは、子供を預けることはできない!」と不安を感じる保護者の方々も多いでしょう。現在、2泊3日のレスパイト宿泊を利用していらっしゃるBさんへの支援体制は、新しくケアホームを創るにあたって、足がかりになるものだと私たちは考えています。彼は、夜遅くても、時々一人で出て行くこととすることがあります。大声や自傷行為の心配もあるので、宿

泊中は、寝る時も隣の部屋には支援者がいる、夜、玄関を開けたら、センサーが反応してブザーが鳴るという体制を作り、常に、職員かヘルパーが見守っています。彼は落ち着いて2泊3日を過ごしていますが、もし、これが毎日の生活になったとしたら、きつと息がつまってしまうでしょう。次に創るべきケアホームには、規制がなくても常に見守ることが出来る住居の形、そして、もっと手厚く人員を配置できる支援体制が必要になります。

先日、Cさんの将来の暮らしについて、お母様とお話をする機会を頂きました。4、5年前、私は、Cさんと、日中の作業所で毎日顔を合わせていました。彼は、人との関わりがとても好きでした。しかし、作業場に入らず、1階で固まってしまう、作業所から出て走り回る、帰宅時間になっても帰らない・・・などの行為も毎日のようにありました。それは自宅に帰ってからの生活にまで影響を及ぼしており、お母様にとっても苦しい日々が続きました。「ヘルパーや職員、社会に迷惑をかけてほしくない。」そんな思いが、彼を「正しい」と言われる方向に導こうと、お母様を追いつめていたのかもしれない。

家族の休養のため、レスパイト宿泊を勧めたことはありましたが、お母様がその誘いを受け入れることはありませんでした。「今のケアホームに預けても、本人にとっても良くはない、迷惑をかけるだけ。」お母様の気持ち伝わってきました。常に支援者が見守れる体制、そのうえ、本人が窮屈に思わない環境、そんな形が望まれていました。彼は現在、仕事中に外に出ることは少なく、ゆつくりと過ごすことができるようになっていています。作業やパズルに集中することも多いようです。時間は経ち、彼らの生活を支えていけるよう、私たちは真剣に取り組んでいかねばなりません。環境を整え、それで終わりではありません。大事なものは、形だけではなく、支援者一人ひとりの力です。言葉にできない思いをくみ取ることで、サインを感じることで、変化に気づくことができます。

「子供がケアホームに入った後、落ち着いて過ごしているのか、不安はたくさん・・・だから早く創ってほしい。」Cさんのお母様の言葉を切実に感じました。保護者の皆様に安心して預けるよう、のんびりしてはいただけません。(宮崎)

平成22年5月11日、ワークス和を利用されていた中村浩信さんが、脳出血で急逝されました。42歳という若さで逝ってしまった中村さんを偲んで、ここに、追悼文として感謝の思いを残したいと思います。

中村さんが亡くなった日の夜、病院から自宅に戻った中村さんに、職員数名で会いに行きました。

眠っているように安らかなお顔で横たわる中村さんの隣でお母様が言いました。「ほんとに一生懸命に生きた。よく頑張ってくれた。」その言葉通り、中村さんのことを思い出すと、いつも一生懸命な姿が目に見えます。

朝、着替えを終えると朝礼前に一人、作業の準備に取りかかります。休憩中も、気付けば作業をしていたり、作業後も何かできることはないかと探していました。

いつも、なかよくしてくれて、ありがとう。なごみの仕事のことばわすれて、ゆっくりとやすらかに、ねむってください。

(池田)

「うんごめん、今日はもうないねん。」「えー働きたいよう。」そんなやり取りをよくしたものです。

「俺が働かな、誰が稼ぐねん。」「お父ちゃんとお母ちゃん、楽しせたらな。」と、いつも誇らしげに話していました。今は自分が一家の大黒柱なんだという意識と、ご両親への想いが、ひしひしと伝わってきました。

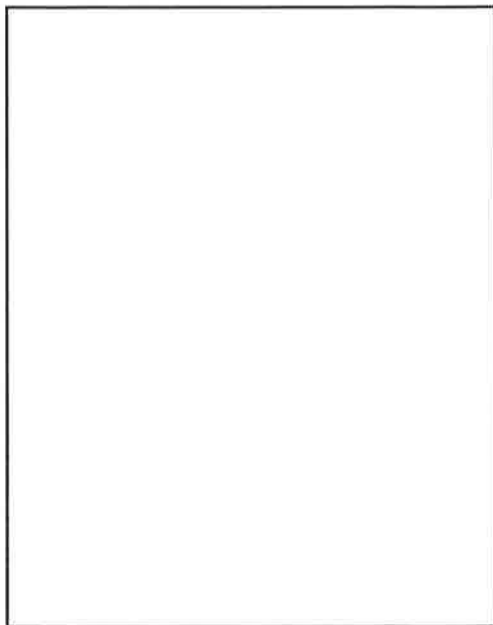
「お菓子を見つけたら、没収してください。」「ほんとはいいの？」「お願いします。」

しかしかかりつけの医師からは、健康のために、油を使ったお菓子は控えるように言われていました。そのことを十分理解して

も、ついお菓子を買ってしまいます。すると、中村さんは自ら職員に言いました。

「あつーこのお菓子なにー？」「えーん、まけて。」お菓子を巡るそのやり取りはまるでコントのようでしたが、あの日の、「自分では我慢できないから」と職員にお願いする真剣な目に、驚きと嬉しさを感じたことを思い出します。

(金井)



中村さん、ありがとう。。。

水頭症を患い、歩行障害や記憶障害を抱えての生活の中、これまでに様々な出来事や苦労があったことを、お母様からお聞きしました。幼い頃には、医師に「20歳まで生きられない。」と言われたそうです。そんなことを微塵も感じさせないくらい、私達の前ではいつも明るく、前向きな中村さんでした。和のムードメーカー的な存在で、仲間を思いやり、何気ない気遣いに、職員はいつも助けられました。

どんな境遇の中でも、自分ができることを精一杯し、一生懸命に生きた中村さんの姿に、学ぶべきことがたくさんあります。

出会えたことに感謝して、中村さんに負けないくらい、懸命に毎日を過ごしたいと思えます。

中村さんありがとう、そして、おつかれさまでした。これからは天国から、私達を見守っていてください。

(野々村)

「お菓子を見つけたら、没収してください。」「ほんとはいいの？」「お願いします。」

(青野)

それ以来、リュックや上着のポケットにお菓子を忍ばせる中村さんと、それに目を光らせる職員のバトル

ワークスユニオンの課題

ワークスユニオンが設立されて早10年目を迎えること、辛かったこと、悔しかったこと、色々な思い出と共に、一人ひとりの利用者が、そして、ワークスユニオンも成熟度を増してきた。

壮年期の利用者を想定した「楽しく充実した働く場」と、「自分らしく生きられる生活の場」の創造を私たちは追及し続けてきた。

しかし、今それぞれの利用者の顔を思い描けば、髪に白い物がかかり混じる。数えてみれば還暦を迎えた人も早3人。

壮年期の支援だけではなく、充実した「老年期」の支援のあり方を本気で考えなければならぬ時期を迎えている。

ワークスユニオンの命題は、「二生涯に亘るドータルな支援」。どの様な「日中活動」のプログラムと、「生活環境」を創造すれば、彼ら

が「充実した老年期」を過ごし、自分なりに「いい人生だった」との思いで、人生を終わらせられるのか？

これは、人生の大先輩の保護者の皆さんに、ご指南を受けながら、少しずつ創っていくしかない。

それに併せて、今までワークスユニオンが、生活支援として手を打たなかった「24時間の濃密な支援を必要とする利用者も、安心して暮らせる生活の場の創造」。この課題にも歩を進めて行きたい。

どんな建物設備が必要で、どんな支援のあり方が、24時間の支援を必要とする人たちの「自分らしい生活」を支えられるのか？

一つ一つ検証しながら進めて生きたい。これがワークスユニオンの「次の一歩」。

中村君、私たちは約束するよ。総てのあなたの仲間たちが、あなたのもとに立つまで、安心して暮らせる「ユニオン」にすることを。

(南石)

職員紹介



原 由希子

「今のままでいいじゃないか」山川氏のこの言葉が彼女の心を大きく動かし、ワークスユニオンの職員となるきっかけとなりました。

普段は、ほんわかとした暖かさを醸し出す癒し系キヤラの彼女ですが「何事にも芯を通しておきたい」「物事を進める時は慎重に」という考えの持ち主。

現在は、居宅支援の職員として活躍しています。趣味は歌うことで、ユニオン職員の中で噂になるほどの美声の持ち主です。

(今藤・高橋)

利用者さんの10年後、20年後を見据えた支援。明るい利用者さんの未来が描けるように、歌を歌いながら毎日支援に努めます。

黒川 朋徳

大学では土木を専攻していましたが、縁あって福祉の世界に入り6年。働きながら専門学校へ通学したというタフな性格の持ち主で、トレッドマークは坊主頭。一見強面ですが、涙もろいというピュアな一面もあります。

音楽が好きで幅広い分野の音楽を聴き、時には自ら楽器を演奏します。

そんな多才な彼は、体を動かすことも好きで、運動が欠かせないよう。日に日に黒くなる彼は、「夏」が似合う男です。

「一人ひとりをしっかりと見たい」という思いのもと、利用者さんにとってよりよい生活となる支援を目指し、日々奔走しています。

(今藤・高橋)

編集後記

「あかん。醬油かけすぎやで。」「もうっー」「職員に言われてるやろ。」「ううっ。」ケアホームの食堂で、日々繰り返される会話です。▼ケアホームには、自閉傾向が強い方も暮らしています。共同生活では、自身のこだわりやパターンが崩されることは度々です。▼仲間とのやり取りでは、手が出るかとヒヤリとすることもあります。お互いに譲歩したり許容したりと、職員の見入なく解決することが多いのです。▼入所時は、地域生活が可能か、保護者の方も職員も不安が一杯でしたが、心配無用な事でした。最近、仲間との関わりを楽しむ姿も見られます。彼らは着実に自分の暮らしを重ねています。▼私たちは、これから生活の支援を必要とする人たちにも、地域の中で、自分の生活を作れるよう支援したいと思えます。新たな支援の模索は、始まったばかりです。(S)